

江戸時代の帯の研究

The Study of the Obi, Sash Belts in the Edo-period.

森 山 和 美

序 文

現在わが国で古くから和服に着用されている帯は、和服の装飾的な方面から見ても切り離して考えられない重要な役割を果しているものである。その中でも女帯は特に、之を着用する度に何時も考えられることは、何とかしてもっと簡単に着用出来れば、和服の脱着が大へん楽になるのではないだろうか。と考えさせられる。後ろで結ぶ帯は、慣れない間はどうしても誰かの手を借りることが必要となり、自分で上手に結ぶには、相当期間の熟練が必要であり、また現代の帯の標準となっている巾では、胸にかゝる圧力も多く、衛生上にもよくないのではなからうか。と思われる。例えば洋服の下着類のコールセットで必要以上に胸をしめつけた十六世紀から、種々改良が加えられ、材料、形式、意匠などについても研究はされているが、和服の帯も江戸時代から現代迄、幾段階か合理化されてはきたが、外観は殆ど変って

江戸時代の帯の研究

いないように思われる。それは現代の和服に帯が必要であり、その結び方が、和服には欠かせない重要な装飾性をもっているからである。このような日本の和服独特の帯が、最初はどんな目的で用いられたのか。又、何時頃から用いられるようになり、現代の結び方の基礎を作ったかは、中古には片かたわな絹や蝶結びが多く、江戸時代になっては、どのような変化をしてきたか。その過程をしらべて、これからの和服の帯の発展への足がかりにしたいと思う。

本 論

わが国の服飾において帯は重要な地位を占めていることは周知の如くであるが、古い時代には衣服の前や裾が開かないように、細い紐状のものを腰にしめ、前、或いは横、後ろなどで結んでその余りを垂らしていたようで、現在のような装飾的な役割は持っていなかったと思

六三

われる。和服の帯として初めて登場したのは桃山期の名古屋帯からである。この名古屋帯は明から渡来したもので、絹の組紐で、太さ約一寸(3.5cm)、長さ一丈(379cm)余、紐の両尖端には豊かな房がついている。それを腰の上あたりに幾重にも巻きつけたもので、その姿は浮世絵にも画かれている。

その後、平ぐけ、広帯と帯は意外に発展し今日に至っているが、その変遷、それに伴う色目、地質、模様などについての研究は後日の機会に譲り、今回は江戸時代における帯について研究の一部を発表したいと思う。

江戸時代になって、その風俗を大別すると、その特色から三期に区分することができ。前期を江戸幕府開府から正徳まで、中期を享保から天明まで、後期を寛政以降幕末(慶応)までとして、前期の特色は、豪壮勇武な風俗が武家や町人に好まれ、華麗大柄なものが流行した。これは一部の武家や富裕な町人、歌舞伎役者に限られ、一般の庶民は長い戦乱の後の苦しい生活で、乏しい材料で作った布子(木綿、紬、麻など)を裾短かに着て帯を締めていたようである。服装の形式は小袖が中心となってきたので、帯は丸括けのものが行われ、上流社会は平帯が多く、中流以下には組帯も少くなかった。組帯は帯といっても縄状に組んだものらしい。平ぐけの帯は後世の物より巾の狭いものが使用され、男帯は巾二寸(7.6cm)位、女帯でも男帯と同寸か少し広(三寸(11.4cm)位)の中のものを使用された。芯には紙を用い、綿などを入れることはなかった。寛永十九年刊「吾妻物語」に見られる遊女の帯は、巾が五〜六寸(18.9cm〜22.7cm)とこう位で、女帯の

巾は後世に比べて狭かったことがわかる。女帯の巾が広くなったのは延宝時代、京都の名優上村吉彌が、舞台で流行させた後であるから、前期の末になって今日の女帯らしい姿に変化したのであろう。長さも六尺五寸(246.3cm)〜約一丈二、三尺(392.6cm)に伸び、巾二尺五寸(94.7cm)となった。これは上村吉彌が花見時祇園で道ゆく女の帯の結び方を見ていると、東洞院の浮世紺屋の名題の女お春が、帯の結手を唐犬の耳を垂れた如くだらりと下げて通ったので、それにヒントを得て早速帯を長くして両端に鉛を入れ、舞台上で帯の結びを垂れて出演し、大向うの喝采を博した。これから世間に流布したのであるという。(男色大鑑)その他一般には、男女共地質も質素で下級品には木綿の物もあった。結び方も始めは男女共一様に石畳(又はかるた結び)という「はさみ帯」をしていた。「はさみ帯」は一名「つつ込み帯」といって、古来のものではなく、寛永頃から京都で始まった結び方らしい。結び方は帯先を結ばずに折り込むだけで、大へん簡単な方法であった。後、吉弥結び、水木結びなど、色々の考案を取り入れた。前期末の元禄頃の女帯は女子の風姿の美観に欠かせないものとなった。寛文以降元禄にかけて、女性の小袖が華美で贅沢となり、吉弥結びから女帯の結び方が垂直になってきた。また元禄頃の名優水木辰之助は身長の高い欠点を隠すため結びの手先を長く下へ下げたのが、水木結びで、結びの両端を二尺(75.8cm)余りも下げ豎一文字にしているから帯の丈が余程長くなくてはならない。また俳優村山平十郎は更に長く豎結びとしてこれを平十郎結びといい、この流派を完成し、女帯の結び方は豎一文字となって、江戸中期の特徴となった。また島

原の遊女からは「つつ込帯」ともいわれる。前の帯の端を押込んで入れたことから、前帯といふことが、年頃の人の流行となった。吉弥結びは安永、天明の頃になって止んだが、後世までその名が残り、やの字結びに類した「腰元結び」を「吉弥結び」の名称で呼んでいたこともある。また、この吉弥結びから、帯の結び方が横から縦に、斜に変わるようになった。それと同時に今迄、前または横に結んでいたものが、後ろ一方に変わってきた。これは結び方が漸次拡大し、従ってこれにつれて帯巾も広くなって、前横では動作に差支えるからであろう。帯の結び手が横から縦に変化したのはこの頃の特徴であるが、初期の帯は前帯中心から始まって、後ろ帯にだんだん変化を生じている。後ろ帯は早くから武家には行われたもので「きてまって武士は婆まで後ろ帯」の句が元禄十年刊「俳諧塗笠」にある。しかし前帯に対する愛着も根強いものがあり、それぞれの好みによって、前、後ろに結んだとある。元禄八年刊「和国百女」の図中、前帯の女性が多く、「女重宝記」にも長さ八尺(203.2cm)の染帯を前結びにするのが流行する、とあるのをもみても、元禄時代になっても前帯が、吉弥結び、水木結びなどに対抗していたようである。後期の女子の帯は容積を大きく結ぶことになり、その形も階級、職業、年令、境遇などによってそれぞれ異っていた。その種類は、さげ下結び、小龍結び、よしを結び、俳優瀬川路考好みの路考結び、ひき上げ結び、引結び、しんこ結び、挟み結び、引しめ、文庫、吉弥結び、高雄結び、小万結び、島原結び、一つ結び、だらり結び、文庫くづし、ちどり結び、おいそ結び、おたか結びがある。文化年間江戸亀井戸天神の太鼓橋落成の時に流行した

太鼓結びは、今もなお流行している。

男子では中期に「猫ぢやらし」などといって、巾の細い帯で後ろで大きく総角に結んで、垂らす風があった。これが江戸後期になると真面目な武士は駒下駄結び、一般民衆は貝の口、神田結び、やの字結びと結び方も次々と生れた。また帯の種類には博多帯、小倉帯、真田帯、羅紗帯、へるへと帯、がある。(へるへとは今のベルベットで通称びろうどのこと)、博多帯は貴賤、貧富、老若を問わず筑前の博多帯を専用したのであった。この本物を本博多といい、模造品は京都や甲州(山梨県)で作られ、また上野(群馬県)で作られるものもあった。

中央の紋を独鉆どくせんといい、仏具の独鉆、三鉆に文様が似ている所から呼ばれている。この文様が一筋のものを一本独鉆、二本を二本獨鉆という。男帯の文は一文(37.9cm)巾一十八・九分(6.8~7.2cm)が普通であり、巾二寸(7.6cm)は広帯で、巾一寸七分(6.4cm)は細帯である。色は媚茶色、紺などがある。小倉帯は庶民、奴僕、丁稚ぢぢが専用、豊前小倉で作られた綿糸の男帯である。色は革色、茶色、紺色で無地や縞がある。真田帯は中流以下の市民が平打の真田帯を用いた。茶色に紺縞を主とした木綿糸の平たい一重組で、丁稚などが冬に用いる。羅紗帯は天保以前武家雇夫の長や芝居木戸番がしめた。色は白、萌黄、黄、茶などがあり、黄色が多い。へるへと帯は天保初年京阪の雇夫や農夫が黒のへるへと帯を専用した。羅紗帯やへるへと帯は神田結びにする。僧侶は筋や縞を用いず白や浅黄やネズミの無地の帯を用い、これを必ず図(参照)のように前結びにする。また三尺や六尺帯を締める者は、工匠、船人、馬士、車力、などで、江戸では鳶のもの

は必ずこれをしめる。またしるし半天を着る者も三尺帯を用い、背で結ばず左前か右前で結ぶ。旅人は男帯の上に三尺帯か、六尺帯を重ねてしめた。

以上のように江戸初期の帯風俗の大変革は特に女性の着物姿に決定的な影響を与え、それ迄は衣服を着るための具に過ぎなかつた帯が、和服姿を総合する機能を果すことになり、服飾の重要なポイントをしめるようになってきた。そして今日の和服の改革、特に帯について色々考えられながらも、決定的な方向が打ちたてられないのは、和服における美的効果が如何に根強く、また優れたものであるかをしめしているのである。いまこの変遷を見ると、江戸時代の女帯の結び方には、後ろ結びだけでなく前結びもあつて、自然に前から後ろ結びに移つたのであつて、生活環境と衣服の流行が今日へと変化したのである。結び方の種類も多く、現代は誰もがほとんど一定した帯巾のものをしめているが、この時代には自分の腰の大小によつて帯巾を考えたともいわれ、また背丈の高低によつて帯巾と長さを変えて用いたということもある。今日のように決まつた形の着物姿より美的感覚が高かつたようであるべき点があるのではないだろうか。現代に於ても和服の着用の際には、背の高低と体全体とのバランスを考えて、帯巾、結び方を工夫することが必要であり、帯の地質、色合などと共に今後とも和服姿の重要な美的要素を占めてゆくであろう帯が、更に変化してゆくのではないかと思われるのである。

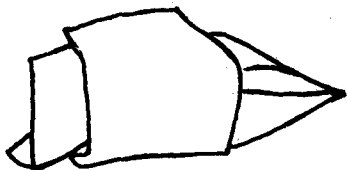
本論文は京都女子大学教授江馬務先生の御指導によつたもので、ここに記して感謝の意を表します。

(短大家政学科 講師)

参考文献

- | | | |
|-------|-----------------|----------------|
| 江馬 務 | 増訂日本服飾史要 | 星野書店 |
| 江馬 務 | 風俗研究(195)(196) | 風俗研究所 昭13 |
| 江馬 務 | 日本服装小史 | 星野書店 昭40 |
| 和田 辰雄 | 日本服装史 | 雄山閣 昭35 |
| 石崎 忠司 | 帯の趣味 | 徳間書店 昭42 |
| 金沢 康隆 | 江戸服飾史 | 青蛙房 昭43 |
| 後藤 守一 | 衣服の歴史 | 河出書房 昭30 |
| 河鱒 実英 | 日本服飾史辞典 | 東京堂出版 昭47 |
| 高木 好次 | 酒落本大系(6巻) | 六合館 昭6 |
| | 近世風俗辞典 | 人物往来社 昭42 |
| | 風俗辞典 | 東京堂 昭47 |
| 北村 哲郎 | 日本風俗図絵(第六摺・第三摺) | 西川祐信筆 |
| | 日本服飾史 | 衣生活研究会 昭48 |
| | 浮世絵 | 毎日新聞社 昭46 |
| 吉川 観方 | 都風俗化粧伝 | |
| | 帯の変遷史 | いづくら織物株式会社 昭38 |

(その1)



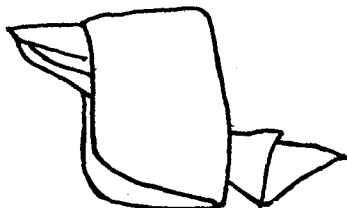
4. 路考結



平十郎結
(江戸中期享保頃)
以上日本服装小史より



名古屋帯 (安土桃山時代)
(江戸初期)

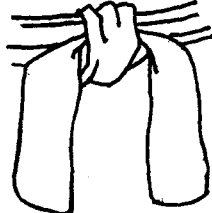


5. 引上結

以下
No.1~21 江戸中期
寛政一文化、文政



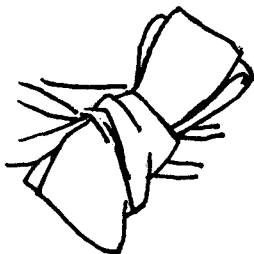
かるた結
(江戸前期寛永)



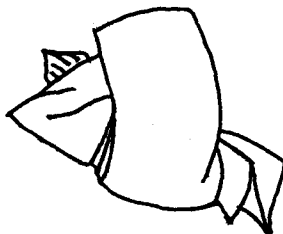
1. さげ下結



かるた結



6. 引結



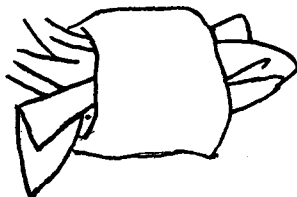
2. 小龍結



吉弥結
(江戸前期延宝)



7. しんこ結



3. 良雄結

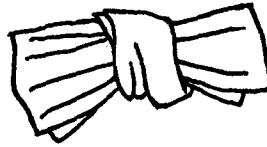


水木結 (江戸前期元禄頃)

(その2)



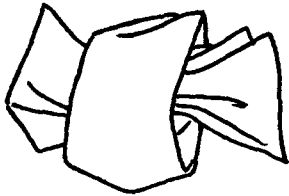
18. ちどり結



13. 小萬結



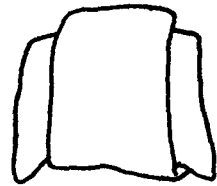
8. はさみ結



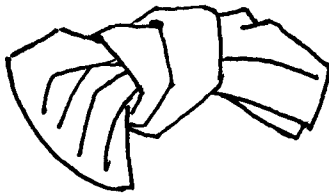
19. おいそ結



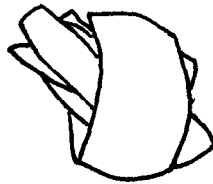
14. 一つ結



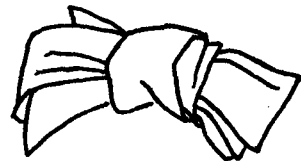
9. 文庫結



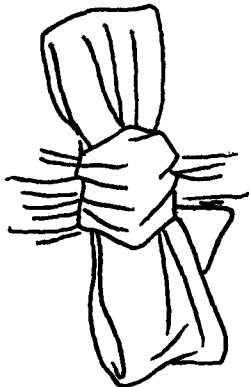
20. おたか結



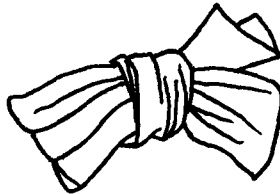
15. 島原結



10. 引しめ



21. 立結



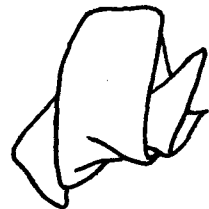
16. 文庫くづし



11. 後の吉弥結
(こしもと結)



17. だらり結

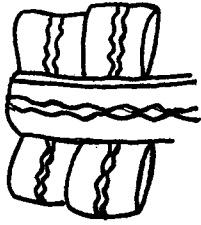


12. 高雄結

(以上都風俗化粧傳抄出)

(その3)

男 帯



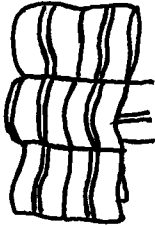
駒下駄結 (江戸後期
文化、文政頃)



貝の口 (江戸後期)



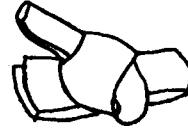
猫ぢゃらし (江戸中期)
昭和、安永、頃



駒下駄結 (江戸後期)



神田結 (江戸後期)



嘉永の頃の商人は
図のように横長に結ぶ



僧侶むすび
(江戸初期より)

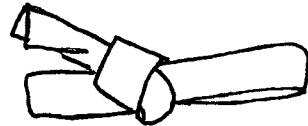
男帯を腰に結ぶ方法



イ (左端)
口 (背)

ハ (右端餘れるを
折返して背に結ぶ)

(近世風俗辞典抄出)



嘉永男結

(その4)

江戸時代の帯風俗

江戸時代の帯の研究

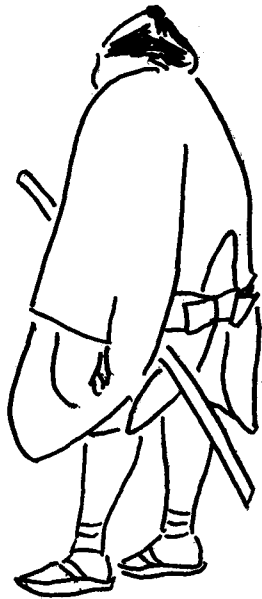


猫ぢやし.

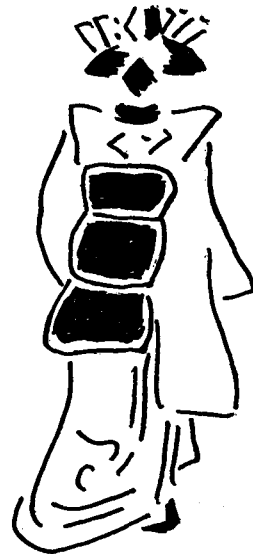
近世風俗辞典 (抄出)



酒落本大系 (抄出)



酒落本大系 (抄出)



酒落本大系 (抄出)

七〇



石川豊信筆「花下美人」(浮世絵抄出)
江戸前期(元禄頃)



江戸初期の遊女 (日本服装史 抄出)
北村哲郎著



日本風俗図絵(絵本浅香山抄出)
江戸中期(享保)西川裕信筆



日本風俗図絵(風俗鏡見山抄出)
江戸中期(享保)